

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2015 年 夏・秋合併号

第 6 巻第 2・3 号 (通算 17 号)

2015 年 12 月 3 日発行

2015 年度 全 国 大 会 特 集

AJEQ2015年度全国大会を終えて
曾田 修司 (跡見学園女子大学)

日本ケベック学会の第 7 回全国大会が 10 月 3 日 (土) に跡見学園女子大学文京キャンパスで開催されました。

午前中の自由論題セッションに続き、午後からワークショップ「州民投票から 20 年—ケベック内政の批判的検討」が行われました。これは、2015 年がレファレンダム実施から 20 年の節目にあたることから、その意義をこのテーマの専門家の議論により検証しようとしたものです。

その後、モンREAL から来日されたマカンドルー教授 (モンREAL 大学) がカナダの教育における間文化主義について大変エネルギーッシュな基調講演をされたのに続いて、教育・文化領域における間文化主義のあり方を議論するシンポジウム「間文化主義再考」が開かれ、文学、パフォーミングアーツ、教育、異文化交流の各領域について、

それぞれ興味深い報告とそれに基づく議論がなされました。

今年 10 月は、世田谷パブリックシアターでロベール・ルパージュ作「針とアヘン」が、神奈川芸術劇場 (KAAT) でカンパニー・マリ・シュイナールの公演が、相次いで上演されたタイミングでした。ルパージュは同作品の中で、自らの分身と思われる登場人物に (ケベック人のたどってきた波乱に富んだ歴史を見れば) 「分裂症にもなるさ」という意味の自己批評を、ユーモアとともに語らせていました。これもまた、含蓄の深いものがあります。(次ページに続く)



挨拶する曾田修司・開催校代表

● 本号の内容 ●

2015 年全国大会特集・・・1 / 解説記事「与党に返り咲いたケベック」(古地順一郎)・・・9

編集後記・・・10



大会参加者の集合写真

なお、大会中、安田敬会員（ダンスカフェ発行人）の撮影による「ケベックの人々」と題する写真展も行われ、ケベックの街々の親しみやすい雰囲気が身近に感じられました。大会後の懇親会には学生も含め多くの方々が参加し、盛況でした。皆様方のご協力により、大会を無事終えられたことに会場校の担当者として改めて御礼申し上げます。（2015年度全国大会開催校代表）

＜各セッション報告＞

2015年度全国大会は、開催校の大塚博・跡見学園女子大学副学長のご挨拶、ケベック州政府在日事務所のクレール・ドウロンジェ代表のご挨拶をいただいたのち、自由論題セッション、ワークショップ、基調講演、シンポジウムの順に行なわれ、活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

自由論題セッション

司会：小松 祐子（筑波大学）

今回の大会では、午前中に3件の自由論題発表があり、異なる分野のそれぞれに意

欲的な研究発表を通じ、ケベック研究の深化を実感することとなった。



仲村 愛会員

1件目の発表は、仲村愛会員（明治大学大学院）による「静かな革命と間文化主義：ケベック史における連続性」であった。「静かな革命」は、フランス語系カナダ人からケベック人へというアイデンティティの変化をはじめ、ケベック社会のさまざまな面に「断絶」をもたらしたと一般に考えられている。しかし仲村会員は、移民受入れ社会としてのケベックが多様性統合のアプローチとして独自に展開してきた間文化主義のなかに、「仏系の生き残り」という伝統的な動機が見られることを指摘し、ケベック

のナショナリズム史の「連続性」を見出すことを主張した。会場からは招聘講演者のマカンドルー氏がコメントし、活発な意見交換が見られた。



立花英裕会員

2件目には、立花英裕会員（早稲田大学）が「両大戦間におけるフランス系カナダ・ナショナリズムーリヨネル・グルーを中心にー」と題する発表を行った。「1930年代、40年代初めにおける、異論の余地のない指導者」として当時のナショナリスト・グループに多大な影響を与えたグルーの足跡をたどることにより、カトリック・ナショナリズムが「静かな革命」により脱宗教化された背景、さらには今日のケベック社会の文化的基盤を理解しようという意欲的な研究である。グルーが中心となったケベックの雑誌『アクション・フランセーズ』と、同名のフランスのナショナリスト団体（および機関紙）との比較にも言及し、ヨーロッパにおけるファシズムとの関係をも考慮する射程の広い研究であった。

最後の発表は、韓国ケベック学会から参加くださったイ・カヤ氏（成均館大学校）によるフランス語での発表で、タイトルは *La quête identitaire et l'identité-relation dans Le premier jardin d'Anne Hébert*（「アンヌ・エベール『初めの庭』におけるアイデンティティの探求と関係としてのアイデンティティ」）である。エベールの小説『初めの庭』は一人の女性の生涯を物語る作品であるが、主人公は人生の展開に応じて三度にわたり姓名を変えていく。別世界との関係によって構築・拡張されていく彼女のアイデンティティを、エドゥワール・グリッサンが『＜関係＞の詩学』で明らかにした「関係としてのアイデンティティ」に比する興味深い分析がなされた。彼女のアイデンティティ探求はケベックの歴史の表象ともなっているのである。



イ・カヤ氏



ワークショップ「州民投票から20年—ケベック内政の批判的検討」

司会：矢頭 典枝（神田外語大学）

ワークショップ「州民投票から20年—ケベック内政の批判的検討」では、AJEQ 全国大会では初めて「ケベックの政治」を真正面から取り上げ、多面的に検討した。



田澤卓哉会員

第一報告者の田澤卓哉会員（広島県庁）は「1995年以降のケベック政治の展開」と題し、まず、ケベック州の政治についての基本的な情報、すなわち、同州の統治機構、現ケベック州政権の概要、1995年以降の政党の系譜、政党イデオロギー類型をわかりやすく説明した。次に、1995年以降の総選挙の動向を振り返り、ナショナリズム・主権問題が常に中心的テーマ・争点であったわけではないことが指摘された。また、直近の2014年総選挙の結果と2015年現在における政局につき、現政権である連邦主義のクイヤー率いるケベック自由党が多数派政権であるため、今後数年は同政権が続くと見られ、主権問題が最前面のテーマに

なることはないのではないか、と論じられた。



荒木隆人会員

第二報告「カナダ・ケベック憲法闘争とケベック・ナショナリズム—州民投票から20年の今日から振り返る—」のなかで荒木隆人会員（岐阜市立女子短期大学）は、1995年の州民投票はカナダ連邦政府とケベック州政府との間の国家体制をめぐる長年の政治闘争の帰結として行われたものであり、その根底にはトルドーとレヴェックの異なる国家間の対立があったことがまず指摘された。人権憲章をカナダ憲法に導入し、個人の権利保護に重点を置く近代個人主義的な自由主義国家としてのカナダの形成を展開したトルドーに対し、レヴェックはカナダを「二つのネイション」から成る国家であるという観点から、個人的権利をその対象や内容が常に変化するものとして捉え、憲法によって権利を固定化することは不可能であり、個人的権利と集団的権利の相互補完的な発展を主張した。1977年の「フランス語憲章」の制定と1980年の「主権連合」

を問うた最初の州民投票の実施にみられるように、レヴェックは、ケベック社会の個人の人々の選択による集団的権利の獲得を目指し、多様なネイションが共存するケベック社会に柔軟な政治的適用力を与えることを意図した。レヴェックのこの考え方は、ケベック州民に対し、純粋な分離独立ではない選択肢を提供することに成功した、という点が強調された。

最後の報告「ケベックの憲法的地位とケベック・レファレンダムの憲法的意味の再考」では、佐藤信行氏（非会員、中央大学、日本カナダ学会（JACS）副会長）は、州が連邦からの離脱権を有さないアメリカ型連邦制とは異なるカナダ連邦制を再検討した。1995 年のケベック・レファレンダムでは、ケベックの主権性を含む設問が設定されたが、98 年のカナダ最高裁への諮問 (Reference Re Secession of Quebec, [1998] 2 S.C.R. 217) では、この問いが回避され、カナダからの一方的離脱の可否が問われた。最高裁は、このような法的権能を否定しつつ、明確な質問に対して「明確な多数」をもって州民の離脱意思が示された場合には、他州及び連邦は、離脱の交渉に応じるべきとした。交渉の責務が法的義務なのか政治的なものかは、判決上明らかとはいえないとはいえ、ケベック・レファレンダムとその後の 20 年の展開は、アメリカ型と異なる連邦制の可能性を、日本を含む世界に提示しているといえよう。この判決に対し、連邦下院が明確さを判断すると定める連邦法 (Clarity Act)



佐藤信行氏



コメンテーターの古地順一郎会員（左）と司会の矢頭典枝会員

を制定したのに対し、ケベック州は根拠を「主権」から「自決権」へとシフトさせ、ケベック自身が判断すると定めるケベック州法を制定した。

コメンテーターの古地順一郎会員（北海道教育大学）は、1995 年州民投票がケベック州内政に与えた影響は次の 5 点にあると論じた。(1) ネイション、アイデンティティに関する議論が活発化した。(2) 主権獲得運動よりも財政再建・経済成長という風潮が強まり、左右のイデオロギー軸が内政で

顕在化した。(3) ケベック党 (PQ) の立場が社会民主主義から新自由主義的な立場へ移行することで、州民投票および主権獲得の必要性に疑問符が生じた。(4) 主権主義運動のなかで路線争いが表面化し、PQ は方向性をめぐって迷走を続けている。(5) 1998 年の最高裁判所の見解や 2000 年の Clarity Act の制定により、州民投票をケベック州の論理だけで行うことは難しくなった。

衝撃的な結果となった 1995 年州民投票から 20 年を経た今年、カナダの国家基盤を揺るがすいわゆる「ケベック問題」について AJEQ 大会で取り上げた。今回のセッションの登壇者たちは、カナダの歴史学、政治学、法学を専門とするだけにそれぞれの報告の内容は濃く、セッション全体は多面的であり、短い時間ながら、会場との活発な議論も展開された。

基調講演

L'intégration scolaire des immigrants et l'éducation interculturelle au Québec: contexte, débats, résultats

Marie Mc Andrew (Université de Montréal)

司会：山出 裕子 (明治大学)

本年度の基調講演は、モンREAL大学教育科学部教育行政・基礎論学科教授で間文化教育が専門の、マリー・マカンドルー教授に講演をお願いした。マカンドルー教授は、移民家庭の生徒の学業向上を目的とした革新的な教育課程を考案・設置するなど、カナダにおける教育学の代表的存在の



マリー・マカンドルー氏

1 人である。2001 年に、著書『学校における移民と多様性』によってドナー賞 (カナダで刊行された公共政治関係の最優良書に与えられる) を、2014 年には、モンREAL市が授与するインターカルチュラル賞を受賞している。

基調講演では、まず「間文化教育の背景と学校における影響」として、ケベックにおける学校教育の歴史が紹介された。具体的には、1977 年までは、民族や宗教ごとに学校が区別されていたが、近年は第 101 号法などの影響により、フランス語学校で学ぶことが義務付けられていること、そうすることで、ケベックの目指す「フランス語を用いた間文化教育」が可能となっている現状が紹介された。また、間文化教育が実践されているのは、モンREALとその周辺地域に限られており、その他の地域では、まだ移民たちに対する間文化教育の効果が限定的であることも、その問題点として指摘された。

次に「フランス語の習得と多元主義の制

度的な適用」の例が紹介された。特に 1977 年以降は、フランス語教育プログラムとそのサポートが充実してきており、それとともに、移民たちの出自言語の取り扱いについての問題があることが指摘された。また、それに関連して、移民たちの宗教の取り扱いとその対応が間文化教育ではもう一つの重要なテーマであることが挙げられた。

最後に、移民生徒たちのケベック文化への統合の実情が、様々なデータを交えて紹介された。特に、移民たちのフランス語習得率が上がっており、それと同時に、移民たちがケベックの高等教育を受ける割合が非常に高いことが指摘された。しかしながら、移民の民族間で格差が見られることや、フランス語を習得し、高等教育を受けた場合でも、移民たちがケベック人としてのアイデンティティを持つことが困難であることなどが、現在の間文化教育の問題点として挙げられた。

講演の後には、活発な質疑応答が行われ、先住民の取り扱いについてや、ケベックにおける英語教育についての質問があった。これらの質問に対して、マカンドルー教授からは、それらもまた、ケベックの間文化教育における重要なテーマかつ問題点であるとして、丁寧な説明があった。

マカンドルー教授のわかりやすい説明と、刺激と示唆に満ちた内容から、1 時間という講演時間があっという間に感じられる、大変充実した基調講演であった。

シンポジウム「間文化主義再考」

司会：小倉 和子（立教大学）

ケベックの間文化主義は、当学会でもこれまでしばしば取り上げられてきた。しかし、日本ではこの訳語には「異文化(間)～」や「間文化～」などがあてられ、「多文化主義」と混同されることさえある。また、ケベックですら、いつ、どの分野で、どのように議論や実践がはじまり、進展して、現在どの程度社会に浸透してきているのか(否か)を歴史的視点も踏まえて包括的に検証した研究は少ない。間文化主義の誕生から現在までを、あえて政治的側面に特化せずに、文学、芸術、教育、社会学等の領域から横断的に再考し、相互の影響関係に注目すること、さらに、この統合理念が、日本を含む他の地域社会の今後のあり方を考えるうえで応用可能なものかどうか問うことが、本シンポジウムの目的だった。

ある概念や主義が社会に広まり、定着するとき、文学や芸術が先駆的役割を果たす例は少なくない。間文化主義についても同様ではないかという推測のもと、まず廣松



廣松 勲会員



曾田修司会員

勲会員（法政大学）が1970年代後半から90年代にかけてモンREALで発行されていた文芸雑誌 *Dérives* (1975-87, ハイチ系) と *Vice Versa* (1983-96, イタリア系) を分析した。前者は79年以降、「間文化的雑誌」を標榜するようになる。一方、曾田修司会員（跡見学園女子大学）は、80年代に続々と登場したパフォーミングアーツ集団に注目し、モンREALが世界に向けてケベック文化を発信する拠点になっていった過程を具体的な



スティーヴ・コルベユ会員

数字とともに示した。また、ケベック生まれのスティーヴ・コルベユ会員（静岡大

学）は、学生として、さらにフランス語教員としてモンREAL大学で体験した間文化的事象を見事な日本語で報告した。最後に飯笹佐代子会員（東北文化学園大学）が、大都市から離れた地域での間文化主義の定着状況について、最近の实地調査の結果を踏まえて報告した。



飯笹佐代子会員

その後、ディスカッサントとして真田桂子会員（阪南大学）と伊達聖伸会員（上智大学）も加わり、会場との討論が行われた。基調講演者のマリー・マカンドルー教授も積極的に参加してくださり、定刻が過ぎてもいっこうに止む気配のない議論に、司会者は冷や冷やした。とはいえ、ケベックの「間文化主義」を多様な角度から眺めるという当初の目的は辛うじて果たせたのではないかと思う。今後は、interculturel という語がまったく別の文脈で使われている地域（たとえばヨーロッパ）との比較にまで踏み込めればと願っている。懇親会場に移ってからさらに議論が続くほど熱を帯びた企画をコーディネートできたことは、企画者冥

利に尽きる。参加してくださったすべての方々に御礼を申し上げたい。



ディスカッサントを務める伊達聖伸会員（左）
と真田桂子会員

<解説記事>

「与党」に返り咲いたケベック

古地 順一郎（北海道教育大学）

10 月 19 日のカナダ連邦議会総選挙（定数 338 議席）は、トルドー党首率いる自由党が予想を上回る 184 議席（得票率 39.5%）を獲得して圧勝、約 10 年ぶりに政権を奪還した。保守党は、99 議席（同 31.9%）にとどまった。選挙戦序盤の世論調査では史上初の政権獲得も期待された新民主党は、44 議席（同 19.7%）と大きく後退した。

ケベック州（78 議席）に目を転じると、自由党がモンリオール圏を中心に 40 議席（得票率 35.7%）を獲得。他党は、新民主党 16 議席（同 25.4%）、保守党 12 議席（同 16.7%）、ケベック連合 10 議席（同 19.3%）

となった。ケベック州でのこの結果は何を意味するのか。

まず指摘すべき大きな変化は、約 20 年ぶりにケベック州選出議員の過半数が与党となったことである。1993 年の連邦議会総選挙以来、ケベック州における第 1 党は野党であり続けた（2008 年総選挙まではケベック連合、11 年総選挙では新民主党）。ケベック州の「与党化」が、ケベック州の利害関係に対する配慮にどのような影響があるか今後注目される。

この変化は、ケベック連合の未来に暗い影を落とすこととなる。同党は、ケベック州の利害関係を連邦議会で代弁することを存在理由としてきた。2011 年の総選挙で大敗するまでケベック州で第 1 党を維持してきたことも、同党の主張を支える根拠となった。もちろん、連邦政府による政策の内容がケベック州の利害関係に一致しないことは今後もあり得るし、ケベック連合が「真の」ケベック州の利害関係を主張することは可能であろう。しかし、トルドー首相がケベック州選出で、同州選出の 6 人の議員が入閣したため、ケベック連合の主張の根拠は弱くならざるを得ない。

また、より深刻なことは、今回の選挙でケベック連合の得票率が初めて 20%を切ったことである。つまり、8 割近くの有権者

が連邦主義政党を支持したのである。さらに、連邦主義に対する総選挙での支持は、前回に引き続き2回目である。確かにケベック連合の議席は増加したものの、ケベック州では第4政党でしかなく（カナダ全国で見ても同じ）、党勢が回復したとはいえない状況にあるだろう。

ケベック連合のデュセップ党首は、再び選挙区で敗れ、政界引退を発表した。同じ日、ケベック州議会では、ケベック党で暫定党首などを歴任したベダール議員も政界引退を発表した。主権主義運動にとっては厳しい情勢が今後も続くことが予想される。

新民主党の苦戦は、市民権授与式でのニカブ着用容認によってフランス語系有権者の不評を買ったことが響いたと言われているが、同じ立場の自由党への支持を見ると説明できない。ハーパー政権に終止符を打つため、戦略的に自由党に投票したと考えられる。

ケベック州のフランス語系有権者は、広告補助金の不適切な使用、いわゆる「スポンサーシップ・スキャンダル」が表面化して以降、約10年にわたって自由党に背を向けてきた。その彼らが、再び自由党に票を投じ、20年ぶりに与党側につくことを決めた。トルドー首相が、ケベック州とどのような関係を今後築くのか注目される。

●編集後記●

遅くなりましたが、AJEQ ニュースレターをお届けします。今号では、10月3日（土）に開催された全国大会の特集に加え、ほぼ10年ぶりの政権交代が実現したカナダ連邦下院議員総選挙についての解説記事を、ケベックはもとよりカナダ全体の政治に詳しい古地順一郎会員に寄稿していただきました。大会ワークショップで議論した1995年のレファレンダムがまるで日本における昭和のごとく遠い時代の出来事になりつつあるかのような、ケベックの新たな政治風景のようにも思えます。

今号から編集体制が変わりました。次号以降の新しい企画を模索しています。(T)

日本ケベック学会（2015年12月現在）

●主要役員

小倉和子（会長）

立花英裕（副会長）

小松祐子（副会長）

伊達聖伸（副会長）

C・ドゥロンジエ

（顧問、ケベック州

政府在日事務所代表）

●広報委員

宮尾尊弘

小松祐子

山出裕子

大石太郎

S・コルベイク

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人：小倉和子

編集人：大石太郎